



生涯学習研究所だより

目次

- ◆所長挨拶
- ◆ジュニア夢カレッジ特集
「対談 ジュニア夢カレッジの企画・立案を経験した人々の語るボランティアとは?」
「とある1日のスケジュール」
「学生リーダーコメント」
「ジュニア夢カレッジに関わった方々からのメッセージ」
「体験した子どもたちの感想」
- ◆第19回生涯学習フォーラム「まちづくり×生涯学習」報告 有川かおり
- ◆平成29年度生涯学習主催研究会報告 川口一美
「データでみる女性の社会的孤立一夜の世界で働く人々のセカンドキャリア」
- ◆i-youth ダンスフェスタ報告 秋戸巴美
- ◆第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会報告 渡辺あてな
- ◆卒業生の今 part3
- ◆実践・研究レポート

Vol.
5

発行／聖徳大学生涯学習研究所

編集長／長江曜子

編集／有川かおり、渡辺あてな

発行月／2018年3月

〒271-8551

千葉県松戸市松戸1169

聖徳大学生涯学習社会貢献センター6階

TEL: 047-365-5691

FAX: 047-365-5692

MAIL: frontier@seitoku.ac.jp



所長挨拶



“おかげ様で19年”地域に開かれた聖徳大学生涯学習研究所をめざして

聖徳大学生涯学習研究所長に就任して丸3年が過ぎました。生涯学習とは「幸福な人生の実現のための学習」の意味ですが、人生100年時代を迎えて、時代に合った生涯学習の意義、地域に開かれた拠点としての研究所の意義を考える毎日です。

生涯学習は、かつて高齢者の学習と据えられていた時代がありました。しかし、今や①0才から100才以上生涯にわたって、自らを磨き、自己の充実を図るもの②技術、知識を得る学び直しリカレント教育③地域創生、社会貢献、まちづくりの3つの視点が重要と考えられています。

本年生涯学習研究所は、アートパーク（7月）、生涯学習フォーラム（10月）、ジュニア夢カレッジ3（12月）を開催し、子どもから高齢者までの学びの世界と、地域の課題解決のための各種課題別研究会の充実を図ってまいります。

ぜひとも、ご一緒にこの19年の歴史を刻むこの研究所で、新しい出会いをしませんか。

生涯学習研究所所長 長江曜子

ホームページ 公式SNSのご案内

聖徳大学生涯学習研究所の最新情報は、ホームページ・公式SNSにて公開しております。ぜひご覧ください。

facebook



Instagram



生涯学習研究所ホームページ

<http://www.tunagari.jp>

生涯学習研究所

検索



ジュニア夢カレッジ特集

2015年度から実施している「ジュニア夢カレッジ」は、子ども（小中学生）と大学生の双方のキャリア教育と地域連携を目的としている事業です。今回は、ジュニア夢カレッジの企画・立案を経験した学生と事務局スタッフに、ボランティアについて語っていただきました。

ジュニア夢カレッジの企画・立案を経験した人々の語る 「ボランティアとは」

長江：学生として、社会人として、色々な形でボランティアを経験してきていると思います。聖徳大学の「ジュニア夢カレッジ」や「ボランティア」への想いについてお話ししていただきたいと思います。まずは関わったきっかけをお聞きかせ下さい。

仲村：中学2年生から、子ども会でボランティアをしていました。祖父母が自治会活動に積極的だったので、地域の方々に孫のように育ててもらったという感覚があります。大学に入ってからは、1年生の時に（独法）国立青少年教育振興機構主催の「第4回全国の学生とボランティアと支援者が集う全国研究交流会」に委員として参加させていただきました。それがきっかけで、色々なところに行くことが増えました。生涯学習研究所に来るきっかけも、これに関わったことからです。

長江：乙部さんはどうですか？



乙部：私は、大学に入ってから初めてのボランティアというと、同好会の先輩が紹介してくれた児童館のお祭りのお手伝いでした。2回目が「ジュニア夢カレッジ」です。

長江：齊藤さんはどうですか？

齊藤：私は、もともとボランティアをやるきっかけというのが「周りの人が頑張っているから、誘ってくれたから手伝う」という感じです。高校の時も、大学の時も、全て「誰かが頑張っているから」ということがきっかけでした。「ジュニア夢カレッジ」は、周

りの人たちがリーダーや立ち上げをしていました。立ち上げから見ていたので、自分に出来るなら頑張ろうって思いました。「仲間がいるからやれる」という感覚です。

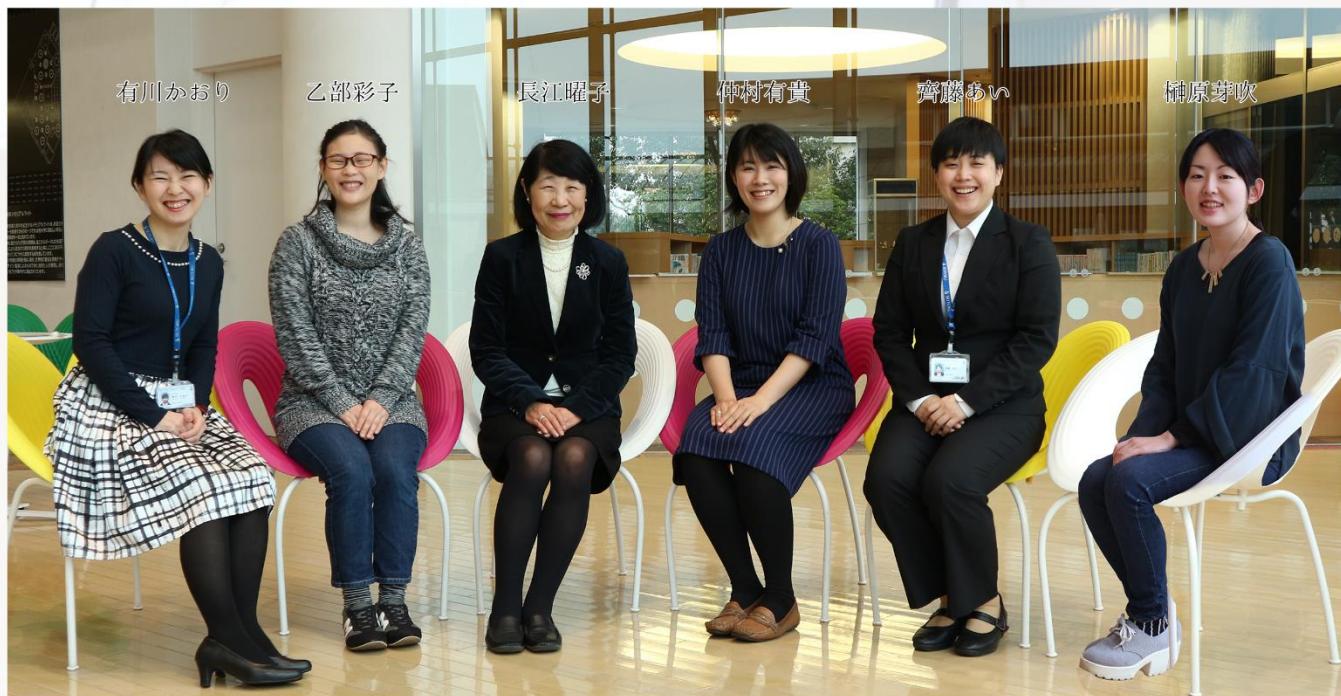
長江：「人から勧められて」「支えたい」とか、そういうことが、きっかけなのですね。

齊藤：そうですね。ボランティアって縁だと思います。だから私は、縁があって「この人のためなら自分の力を貸したい」とて思わなければ動けません。

長江：榎原さんはどうですか？

榎原：私はある授業の講義後に当時の「ジュニア夢カレッジ」メンバーのリーダーが勧誘に来ていたのがきっかけです。元々親が福祉系の職についていた影響か、誰かのためになることを探していました。ボランティアを探して中で、大人が勧めるのではなく、学生が直々に勧誘に来てくれるのは新鮮で、話している姿が本当に楽しそうだったので、せっかくなら楽しく活動したい、ということで参加してみました。

長江：さっき仲村さんも話されました、親御さんの影響って大きいのかもしれませんね。関わるきっかけは、親御さんだったり、おじいちゃんおばあちゃんだったりしますね。



齊藤：私の親も「ママ友がやっているからやる」という、私と一緒にあります。繋がりがあるからやるというスタンスです。PTA活動等に積極的だったのは、一緒に頑張りたい人が居たからなのだと思います。

長江：お母さん的人間性が根付いているんですね。「助け合う心」のような感覚が残っています。それは言葉で学ぶのではなく、親や人の行動を見て学ぶのではないかと思います。損得ではなくて、自然と繋がっていくのだと思います。皆さん「人間としての基礎力」や「活動力」の根っこが生える土壤が、きちんと出来ているのかなという感じがします。「楽しそう」と思わせる、「楽しさの本質」はどんなところにあるのでしょうか。

榎原：やっている人たちが「輝いている」「楽しんでいる」ことが分かることがあります。活き活きしているのを見ると関わりたくなります（笑）

長江：楽しそうな人が居るって大事なことですね。

齊藤：私はやっぱり仲間がいるから、仲間で何かをするというのが楽しいですかね。1人だったらやっていません。

仲村：仲間で何かをして、楽しんでいるうちに「気がついたら誰かのためになっていた」というのって、凄く良いなと個人的には思いますね。

乙部：人間的な魅力がある人にはついていきたいと思います。私の場合は「変わりたい」という気持ちが、ボランティアの根本にあります。ですので、魅力的な人だったら一緒にやりたいです。

長江：「楽しそう」「魅力的な人」がキーワードかもしれませんね。乙部さんは、自分が成長したいという気持ちが凄くのあるのですね。

乙部：そうですね。人の輪に入していくのが凄く苦手で、それを変えたくて、高校2年から生徒会にも入りました。社会に出るために、とりあえず人と関わらなきゃと思った行動です。自分は人間的な

乙部彩子

児童学部児童学科3年



魅力が全く無いと思っていました。そこを何とかしたいと考えて、思いついたのがボランティアでした。

長江：高校2年生だと、普通だと受験とか進路とかの方向に行ってしまう中、生徒会にチャレンジですか？すごいですね。

乙部：受験も大切ですが、受験の先にはやっぱり社会があると思います。その時に、勉強も勿論大切だけど、人間的な部分も大切じゃないかなと思いました。

有川：人間力ですね。そういうふうに思ったきっかけは何ですか？

乙部：中学時代、人との関わりが凄く苦手を感じることが多々ありました。友達との距離感が分からなく、人前にも絶対出たくないと思っていました。でも、自分を見てもらいたい欲はありました。どうしたら良いかを高校に進学してから、少しづつ考えた結果です。

齊藤：そこに至るまでの過程がすごいですね。

乙部：自分は「0地点よりも下にいた」という意識がありました。なので、とりあえず0に上げなきゃと思っていました。

ひと
聲
が
か
る
け
つ
れ
て
す
ご
い
こ
と

勉強も勿論大切だけど、人間的な部分も大切じゃないかな

長江：「変わりたい」という意識は人間必ず持っていますね。齊藤さんにとっては、何か変わりたいと思うことはありましたか？

齊藤：中学生の頃に色々あって、高校受験も失敗して、このままじゃダメだなと思うことはありました。高校に入った時、まず高校で成績トップを目指そうとか、色々部活も入ってみようと思いました。そこで、バスケットボール部とテニス部に入りました。あと、憧れの先輩に誘ってもらってボランティア部にも入りました。

長江：良い出会いがあったのですね。

齊藤あい

レジャーレクリエーション学研究室助手

数ある中から選んでくれたなら力になりたい

齊藤：出会いで自分が成長している感覚はあります。せっかく数ある中から私を選んでくれたなら力になりたいという感覚もあります。

長江：必要とされているという感覚ですね。仲村さんも高校の時に生徒会やっていましたけど、それって自分を変えようと思ったからですか？

仲村：私は違いますね。高校の時、クラス委員みたいな目立つことをやったことがなかったから、やってみようと思いました。でも、じゃんけんで負けてなれませんでした（笑）。そこで、放送委員のクラスのまごめ役をやろうと思ってやってみたら、そこの委員長と仲良くなりました。委員長が生徒会長に、面白い人がいるよって話したらしくて、いきなり放送室に生徒会長が来て「生徒会やらない？」って、言わされました（笑）。

長江：スカウトですね。

仲村：突然すぎて「えっ？！」ってなりました（笑）。でも、その時の生徒会の担当の先生が凄く面白い先生で、先生がいるならやりたいって思っていました。関わるようになって、「うちの高校を良くしたいな」と思い、最終的に生徒会長までやりました。生徒会や、自分の為とかいうのはあまり興味が無くて、そこにいた人、やっていたことが面白そうで、やってみたら好きになっちゃったからもっと良くしたいという感じでした。

長江：皆さん個性的に輝いていますね。縁っていうのはすごいですね。「誘われないとやらない」ってその通りだと思います。そういう意味では「誘われた時にNOと言えないタイプ」がボランティアにはまるのかもしれませんね。

全員：あ～（納得）

長江：その「NOと言えない理由は」何のかっていうのを、皆さんから教えてもらったような気がします。「キ

ラキラ輝いている」とか、「支えたい」等がキーワードですかね？「ジュニア夢カレッジ」って不思議な世界だと思うのです。実際に、自分が体験するわけではなく、体験するのは子ども達です。企画を立てなければいけないのは学生の側で、地域の人とか、大学の先生とかを繋いでいかなければいけません。一番大変な役割が有川さん達だと思うのですが、そのへんはどうですか？子ども達も輝いていましたか？

乙部：一生懸命ですね。将来の事をよく考えているという感じが凄くします。

長江：よくある、小学校や中学校でやる職場体験とは違う感じですか？

榎原：なんとなく雰囲気が違うような気がしますよね。

仲村：学校とかの体験って枠が狭いものが多いような気がします。実際、身近な商店に限定していることも多いと思います。皆が憧れるような「医者」とか「弁護士」や「建築士」「看護師」のような、専門性を求める職業子どもにとって、興味があっても踏み入れにくい領域だったりすると思うんです。そういう意味では、まさに「夢のカレッジ」なのかなとは思います。

有川：大学がやる意味ってそこなのかもしれませんね。一つ質問して良いですか？対象が小学校4年生から中学校3年生という、異年齢集団であることはどう思いますか？発達段階が相当違いますし、意識しないと同世代の交流ばかりになってしまふ今の社会では、意図的に異年齢で集まって学ぶ場を設定することの価値はあるのではないかと思います。小学生と中学生が混ざり合う空間というのはどうですか？

乙部：一緒に居るけれど、混ざり合っている雰囲気にはなっていない印象はあります。

仲村：私の担当した「看護師体験」では、お昼休みにゲームをする時間を少しもらいました。ですので、その時間に皆と関わるきっかけがありました。その結果、お昼を食べて午後のワークの時間には、隣の席の子と「心拍数どうだった？」等、関わりを持つ場面がありました。たまたま隣同士になった学校が違う子と、ちょっとした会話が出来るのは良いなと思いました。

長江：異年齢の多様な人たちとの交流を意識するのは、今後必要なことかもしれませんね。埼玉県松伏町に、「ミニマツブシ」というお仕事体験をやっているイベントがあります。小学生の時に凄く楽しい経験をした子は、中学生や高校生になったら、企画に関わっているらしいです。さっきの話ではないですが、仕組んでリーダー

仲村有貴

児童学部児童学科3年

や
つ
好
て
き
み
に
た
な
ら
つ
も
ち
つ
や
と
つ
良
た
く
か
し
ら
た
い

をつくるということじゃなくて、「楽しかったからお手伝いしたい」という子が、ジュニアスタッフのような形で一緒に活躍してもらうと良いかもしれませんね。

有川：体験した中学生が高校生になってから、手伝いたいって戻ってきてくれたら、凄く嬉しいですよね。学生参画の次は、子どもの参画を目指したいですね。高校生になっている参加者には、お手紙を出して「企画からやってみませんか？」みたいのも良いかなとも思っています。

有川かおり

生涯学習研究所助手

学生参画の次は、
子どもの参画を目指したいですね



乙部：誘われたらうれしいですよね。

長江：それって、お金に代えがたい価値ではないかと思います。マザー・テレサは「人間にとて一番悲しいことは、誰にも必要とされないと思う事」だと言います。誰にも必要とされてない人なんて、この世に居ないはずですが、関わらなければそんな思いは、どこかにいっちゃうのかもしれませんね。ひと声かけられれば繋がるってすごいことだと思います。

有川：本質的な質問ですが、ボランティアは皆さんにとって必要ですか？バイトでお金が貰えるなら、そちらのほうが良いって考え方もあると思います。交流関係だってバイトでもできる。そんな中で、なぜボランティアなのか？ということを聞いてみたいです。

齊藤：仕事の場合は、お金が発生する分責任を伴います。仕事するならお金は必要だけど、手伝いとかお金をもらうとなるか違うような気がします。友情っていうより、仕事仲間みたいになっちゃうのかなっていうのがあります。

乙部：齊藤さんと凄く似ているのですけど、私の中でボランティアっていうのは「新しい人間関係が作れる場」というイメージがあります。そうすると目的は、「新しい人とつながりたい」になります。バイトの目的は「お金をもらうこと」です。人間関係なんて二の次です。ボランティアとバイトの違いは、人間関係の濃さもあると思います。

仲村：少し論点がずれますぐですが、私は「ボランティア」という言葉は無くなれば良いと思っています。今の社会って、人との関わりが希薄な人が多いですよね。例えば隣の家に誰が住んでいるか分からないとかという人もいます。ボランティアは、誰かの為に何かをしたいっていう、元々ある気持ちを一步踏み出してあげるための言葉なのかと思っています。ボランティアという言葉があるからこそ、この人の為に何かやりたいと思っていることが出来ます。しかし、ボランティアという言葉ではなく、自然に色々な人が

支え合える世の中になれば良いのかなとか思っています。

長江：「ジュニア夢カレッジ」に関わって変わったことはありますか？

乙部：変わったかどうかは分かりません。私は自分にすごく甘いところがあります。でも、「ジュニア夢カレッジ」をやっている間は、少しはマシになれたのかなと思います。新しい人間関係ができたり、色々な話を聞けて、自分の知識や興味の方向を伸ばせてもらったりとか、得したかなって気持ちは凄くあります。

長江：齊藤さんはどうですか？

齊藤：私は変わったというより、「自分がどういう人なのか」というのが、少し分かりましたね。まず大人の方に、笑顔が良いねって言われて、結構笑っていることに気が付きました自分では分からない自分を、「ジュニア夢カレッジ」では皆が見てくださっている。それに気付けたというのが一番大きいです。

長江：榎原さんはどうですか？

榎原：私は相手の立場になって考える力がついたと思います。参加者の子ども達に楽しんでもらいたくて色々な案が出ますが、私達大人の軽い気持ちで「こうすれば喜ぶ」は押し付けになります。でも、せっかく企画をするのだから、押し付けではなく本当に子ども達が喜ぶプログラムにしたいと思います。その中で、世代が違う人の視点に立って考えるというのは本当に難しいことでした。結果として子ども達が喜んでくれてよかったです。

榎原芽吹

心理・福祉学部心理学科3年



長江：仲村さんはどうですか？

仲村：今回一番学んだことは、どうやって人に、自分の楽しい物や好きな物を、魅力的に伝えられるのかっていうところです。今年は、学内外で「ジュニア夢カレッジ」の宣伝をする時間を多く頂きました。誘った人たちには「やって良かった」と言ってもらいたくて、こまめに声をかけたりすることに気をつけました。相手を気遣うところも改めて大切だなと思いました。

長江：今日は皆さんありがとうございました。皆さんの「ジュニア夢カレッジ」や「ボランティア」への想いを聞いて良かったです。来年度の「ジュニア夢カレッジ4」も、楽しみながら企画して実践力を身につけましょうね。

（座談会実施日：2018年3月5日）

とある1日のスケジュール



	心理学部 家族心理コース3年 学生Sの1日	児童学部 保育士養成コース3年 学生Nの1日	短期大学部 図書館司書プランチ2年 学生Iの1日
6:00	睡眠	睡眠	睡眠
7:00			
8:00			
9:00	1限授業	睡眠	短大生なので、就活と一緒にイベント準備もがんばってくれました!
10:00	お昼ごはん & イベント準備	授業の空き時間に研究所へ来て準備をしています!準備に来た他の学生とワイワイ話しながら昼食も食べています	当日ボランティアで来てくれる人達と、毎週水曜日の1限に集まる約束をして準備を進めています。2限の時間には講師の先生方とも集まつて準備をしました!
11:00			
12:00			
13:00			
14:00	4限授業	ゼミ	1,2限授業
15:00	イベント準備	イベント準備	2限が終わってから5限までの間が空き時間なので「なにかお手伝いありますか!」と研究所へ遊びに行っていました。(笑)自分の仕事以外の事をやったり、先輩たちと講師のもとへ打ち合わせにも行っていました。
16:00			
17:00	イベント準備	ゼミ	3限授業
18:00			
19:00	フリー時間	ピアノ練習	4限授業
20:00	フリー時間		5限授業
21:00	フリー時間		フリー時間
22:00	就寝	就寝	就寝
23:00			
24:00			

学生リーダーコメント



渡辺 梨紗子
文学部文学科4年

ジュニア夢カレッジの立ち上げ時から学生スタッフとして関わり、3年目の今回は佐々木さんと一緒に学生リーダーをさせていただきました。

立ち上げ時は私も今よりずっと未熟で、とにかく先輩たちについていくだけで精一杯でした。

しかし、参加者の保護者の方々からはよい反応をいただき、とても嬉しかったことを覚えています。これが私の社会貢献活動の第一歩でした。

3年間で私が感じた達成感や驚き、楽しさを、この企画を通して後輩たちが少しでも感じてくれたなら、学生リーダーとして嬉しく思います。



佐々木 真歩
文学部文学科4年

ジュニア夢カレッジが始まって以来、3年間携わらせていただきました。産学官民が連携したイベントの中で様々な立場の方と関わることができ、とても貴重な経験になりました。

私自身、就職活動を行う上で、今後のキャリア形成を考える良い機会になりました。

また、1つの企画を通して、学年・学部の枠を越えた学生間の新しい交流が生まれることも魅力のひとつだと感じています。

ジュニア夢カレッジと共に歩んだ3年間で多くのことを学ばせていただきました。

今後の後輩達の活躍も期待しています！

「忙しい学生生活の中、ボランティアできるの?」という疑問にお答えします。
大学の授業の隙間時間を使ってジュニア夢カレッジの準備をしてくれた3人の学生の1日のスケジュールを公開！

榎本 孝芳
NPO法人クリエイティブまつど工房
代表理事



子どもたちに、プロの方が色々な仕事を、つちかった経験や工夫を凝らして、実践や体験を通して伝え、将来への夢や希望をもってもらえるような企画として「ジュニア夢カレッジ～プロから学ぶおしごと体験～」を開催するというのでお手伝いを始めました。このプログラムは、単に子どもたちを啓発するだけではありません。関わった聖徳大学の学生さんが、協力する企業や地域の方、NPOの方々と連携し、「目的を達成するというプロセスを学ぶ意義もある」との説明を受け、大変すばらしい事だと思いました。

今回関わった方々のネットワークは素晴らしい、弁護士さんやパテエシ・音楽家の方や新京成電鉄の方など、まさに地元の産官学の方々の協力を得て実現しているプログラムです。子どもたちが楽しみながら、大変熱心に参加されている姿を見て、教える側のプロの方も大変やりがいを感じていただきました。最後の成果発表で、目を輝かせている子どもたちの姿に大満足のプログラムです。

何年か後に参加した子どもたちが、プロとしてこのプログラムに関わっていただけたら、本当の意味で「ジュニア夢カレッジ」になると思います。

ジュニア夢カレッジ
に関わった方々からの
メッセージ

私は初めてジュニア夢カレッジに参画しました。当初は不安が大きく、少し気持ちは引き気味でした。企画から携わってきましたが、本格的な話し合いが進むにつれ、子どもたちに「職業」について沢山学んでもらいたいという思いが強くなっていました。私は、今まで自分の意見を言うことがあまりできませんでしたが、今回参画したことで、自分自身の改善すべき点がみえてきました。

「ジュニア夢カレッジ」当日は、子どもたちが「職業」に対して真剣な眼差しをもち取り組む姿や、時には笑顔が溢れる場面がありました。このような子どもたちの様子は、こういった活動を通してしか見ることができない表情なのではないかと思います。

「ジュニア夢カレッジ」を通して、自分自身の改善すべき点を知れたこと、子どもたちの様子真剣な眼差しを見られたことなど、良いことが沢山ありました。「子どもたちの学び」「学生の学び」双方があるのが「ジュニア夢カレッジ」なのだと思います。学んだことを、この先に活かしていきたいと思います。



倉辻香里
児童学部児童学科3年

体験した子どもたちの感想

先生がとても、あつく語ってくれて、自分で、あくなれようかな気がいた。
文も書くのが、とても苦手だったけど、少し得意にかけようかな気がいた。

小4女子/新聞記者体験

とても、説明が分かりやすくて、おもしろかった。
もう一回やりたいです。

小5男子/建築土木体験

お父さんやお母さん、また自分が高齢者になれたときは、今日習ったことを生かして、料理をしてみたい。

小6女子/管理栄養士体験

夢の1つに、音楽療法士があたので職業体験にきました。

今日の職業体験で、音楽療法士の仕事内容がよくわかり、夢へ向けて一歩づきました！

中1女子/音楽療法士体験

医者になりたいという夢がいっそう強くなった。

中2男子/医師体験

馬鹿見室に入ることができた、よかったです。馬鹿の放送もでき、大きくなるけれど楽しかった。さうしたところが、とても楽しかった。

小4男子/鉄道職員体験

▼当日の様子や、詳しい体験プログラムはこちらからどうぞ！▼

facebook



Instagram



生涯学習研究所ホームページ

「ジュニア夢カレッジ3」の研究・実践報告ページです



ジュニア夢カレッジ



10月1日13:00～16:40に、聖徳大学生涯学習社会貢献センター(14階)で、第19回生涯学習フォーラムを実施しました。今年度は、本研究所設立20周年の前年にあたる年でした。したがって、次年度の20周年に向けたフォーラムにすべく、協議を重ねました。そして協議の結果、生涯学習をまちづくりの視点で考えることを目的とし開催しました。

当日は、第I部、第II部の二部構成としました。第I部は「地域に響く親力」と題し、NPO法人ハンズオン埼玉常任理事の西川正氏に、自身の活動を交えながらお話ししていただきました。第II部は「アートパークを語ろう」と題し、2008年から10年間継続して実施してきたアートパークについて、多様なセクターの方にパネリストを依頼し、各々の立場から語っていただきました。本稿では、そのご報告を致します。

第I部 地域に響く親力

第I部は、「地域に響く親力」と題し、NPO法人ハンズオン埼玉常任理事の西川正氏にご講演いただきました。現代社会は、公園や施設には禁止の貼り紙が増え、子どもの声は騒音扱い、声をかけると不審者扱いという現状があります。しかし、子どもが遊びを通して育つには、自発的に活動することを通じ、学ぶことが必要不可欠のはずです。西川氏は、そんな管理された遊びに警鐘を鳴らし、保護者や地域の方を巻き込みながら、子どもたちが安心して遊べる環境を整備するために活動しています。「おとうさんの焼き芋タイム」「おとうさん的人間観覧車」「路上のビッグ将棋」等、実際の写真を見せていただきました。

西川氏の活動は、子どもの遊び環境を整備する一方で、「大人たち自身も楽しんでいる」ということが印象的でした。例えば「路上ビッグ将棋」は、対局していると通りすがりの人が「次はこうした方が良い」等の助言を下さるようです。意図的に繋がろうとしなくとも、自然と人と人が繋がっていく仕組みは素晴らしいと感じました。

第II部 アートパークを語ろう

第II部の「アートパークを語ろう」では、10年間継続してきたアートパークに、様々な立場で関わってきた方々にパネリストを依頼しました。「教育」「アート」「まちづくり」「子育て」「ランドスケイプデザイン」の視点から発表していただき、多角的にアートパークを捉えなおすことを目的としました。その後フロアからの質問を受けました。

パネリストは以下の通りです。

教育の視点

北沢昌代(聖徳大学短期大学部准教授)

佐藤牧子氏(聖徳大学大学院教職研究科学生、元幼稚園教諭)

渡辺あてな(聖徳大学生涯学習研究所職員、聖徳大学卒業生)

アートの視点

森純平氏(PARADAISE AIR)

まちづくりの視点

榎本孝芳氏(NPO法人クリエイティブまつど工房)、

子育ての視点

石川静枝氏(NPO法人まつど子育てサポートハーモニー副理事長)

ランドスケイプデザインの視点

シギット・ムルヤンシャ氏(千葉大学大学院 木下勇ゼミナール 学生)

それぞれの視点からの発表は素晴らしく、あらためて「地域社会の中でのアートパークの役割」を考える契機となりました。なお、第II部の詳細につきましては、「生涯学習研究所紀要16号」に全文が掲載されています。ちらもあわせてご覧いただければ幸いです。

(文責 有川かおり)

平成29年度生涯学習研究所課題別研究会では、9人の研究員による、多様な課題解決のための研究会を実施しました。

今回は、福祉の領域の研究会である「データで見る女性の社会的孤立—夜の世界で働く人々のセカンドキャリアー」(担当:川口一美研究員、佐藤可奈研究員)について、ご報告いただきました。なお、他の研究会のご報告につきましては、ホームページをご覧ください。



引用: GAPFacebookより(<https://www.facebook.com/growaspeople343>)

平成29年度生涯学習研究所の課題別研究会は、10月28日16:30～18:00に生涯学習社会貢献センター(10号館)の12階で行われました。今年度は「データで見る女性の社会的孤立—夜の世界で働く人々のセカンドキャリアー」と題し、NPO法人Grow As People (GAP)代表理事の角間惇一郎氏を迎えて、学生や地域の方など、一時は立ち見が出るほどの盛況な会となりました。その内容をご報告いたします。

今回の研究会を開催するにあたって

今年度は、地域社会の孤立を身近な問題としてとらえ、地域の人々と学生が共に考える機会にしたいという主旨から、若者や女性が社会の中で抱える問題に焦点を当てました。

近年の社会情勢から、学生は奨学金やアルバイトなど自ら学費や生活費を捻出している者も増えています。自身の今後、一生涯について考え、それに備え学ぶことの重要性(これは若い学生のみならず)を感じます。そんな折、角間氏の著書『風俗嬢の見えない孤立』に出会い、私たちが考えるよりすぐ近くに性風俗産業で働く人(ここではキャストと呼んでいるが)が孤立した状態で地域に存在していることを知りました。学生が授業終わりに参加できるような時間帯、社会人も参加できる土曜の夕方を設定し、単に講演を聴くのではなく、この会に参加した私たちも自ら考え、発信できるよう第一部は講演、第二部はシンポジウムの形式としました。

第一部Grow As People代表理事角間氏の講演

この講演では、現在の夜の世界の仕事が簡潔に分類され、漠然と見ていた夜の世界の仕事が、多様化していることが分かりました。また、夜の世界で働く女性や水商売といわれる仕事の垣根

が低くなっている、アルバイト感覚で始めるケースや夜の世界で働くことで、昼の仕事の収入を簡単に超えてしまい、夜の仕事で効率よく稼ぐ方向に移行する女性もいると知りました。ただ、店舗型(お店に籍を置く従来の夜の世界での働き方)以外の新しい夜の世界の働き方は、年齢を重ねると、ターニングポイントになる時期があり、そこからのキャリアをいかに考えるか、準備をしていくかでその後の生活が変わっていくことも目の当たりにしました。この業界でもやはり、他者と関わること、支える人がいること、また、どんなときもチャンスがあり、情報を手に入れ一步踏み出すことは重要で、地域社会で「孤立する人に必要な要素」と変わらないということも分かりました。

第二部シンポジウム

第二部では、助言者として角間氏、シンポジストは、聖徳大学社会福祉学科高尾公矢学科長と社会福祉学科4年平岡佳さん、社会福祉学科3年吉田泰菜さんを迎え、各々の視点で発言しました。

高尾学科長は、戦後以降の日本における水商売の歴史、変遷等話され、平さんは、卒業後福祉分野で働くこともあり、卒業後現場で今回の学びを活かしたいと述べました。吉田さんは、佐藤ゼミで角間氏の著書に出会い、1年間夜の仕事や水商売の歴史について研究したことを探しました。

その後フロアからの質疑応答も多数あり、今後もこの問題について関心をもって自分たちでも追いかけたいという思いとともに幕を閉じました。

(文責 川口一美)

i-youth ダンスフェスタ

生涯学習研究所開設から19年、学生時代に生涯学習研究所事業に参画し、企画・立案等の多様な経験をした卒業生が社会で多く活躍しています。彼女たちは参画を通じて得た力を、どのように発揮しているのでしょうか？そこで今回は、卒業生が企画・立案に関与した「ダンス講座」「i-youth ダンスフェスタ」（主催 東京都板橋区教育委員会）について報告していただきます。



ダンス講座実施の経緯

1年半くらい前から「最近ダンサーが区内に増えてきているな」と感じ、職場の「まなぼーと板橋」で、ダンサーが練習できる環境づくりをしていました。私自身も学生時代にヒップホップをやっていたので、「青少年が気軽にダンスができる環境を作りたい」という思いからです。スタートしてみると反響が大きく、もっと気軽に集まってもらうためには、どうしたら良いか考えるようになりました。あれこれ考えている中、プロダンサーのブレイクダンサー金後（Bboy DOUBLEU）さんと出会いました。これからダンス事業について相談していく中で、YassさんやNoriさんなど有名なダンサーのワークショップを開催させていただくことになりました。そこから安定して、人が集まってくれるようになってきました。

「ダンス講座」から 「i-youth ダンスフェスタ」へ

以前から、ダンスの小さな発表会はやっていました。しかし、ワークショップの際の反響が大きかったこと、所長からも「若い子達が喜んでこんなに頑張ってくれるならもっとしっかりした発表の場を設けるべきではないか」とその後押しがあったことから、区内のホールで開催させていただきました。

青少年が自分たち自身で創る 「i-youth ダンスフェスタ」

協議の結果、2018年2月4日（日）に「i-youth ダンスフェスタ」を実施することになりました。「青少年が自分たち自身で創るダンスフェスタ」にすることを意識し、当事者である青少年が主役になるような仕組みづくりをしました。毎月ワークショップやプロのダンサー、他のダンスチームとの交流会を行いました。この目的は、同じくダンスをしている人々から刺激を受け、フェスタ当日に向けモチベーションを高められる場にすることでした。

「i-youth ダンスフェスタ」当日は、400人以上の方にご来場いただきました。ショーコンテスト形式にし、有名なダンサーに審査員とMCを依頼しました。このことにより、来場者たちは大いに盛り上がりました。

青少年との関わりから 見えてきた課題

青少年との関わりを通して、あまり感情表現が得意ではない青少年が多いことが分かりました。プロのダンサーが目の前にいても、驚いているのか、あまり興味が無いのか反応が薄いケースが多くなったように思います。普段、青少年と話をすると、「いつもSNSやYoutubeを見ている」「この人すごい」と話してくれることが多いのに、いざ本人を目の前にすると上手に反応できないケースもあるようです。しかし関わりをもつ中で、少しずつこの状況は緩和されていました。今後も、「夢を叶えたプロとの交流の促進」「企画・立案のプロセスについての学習」を通して、彼らの将来選択のヒントになるような事業を展開していきたいと思います。



秋戸巴美

*東京都板橋区 社会教育指導員
*2012年度 人文学部生涯教育文化学科卒業生

第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会



（独法）国立青少年教育振興機構主催「第6回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会」に分科会パネリストとして参加してきました。その報告をさせていただきます。

関わったきっかけ

関わったきっかけは、この研究交流集会の学生委員をしていた本学の学生から、「学生時代の話をしに来てください！」と誘われたことです。正直言って、最初はあまり乗り気ではありませんでした。なぜなら学生時代、「ボランティアをしよう」と思って、ボランティアをしたことが無かったです。しかし学生から、「昨年までの分科会は、年齢も活動内容も学生から遠い方からのお話しが多くなった。ですので、卒業して1年経った渡辺さんの話を聞きたいです！」と言われ、講師を引き受けたことにしました。

他のパネリストの顔ぶれ

当時は、12あった分科会の1つ「ボランティアとわたしの未来」に参加しました。「今、ボランティアに関わっている学生の将来の夢」「社会に出てから学生時代のボランティアがどう活かせるのか」という視点で、学生たちとディスカッションを進めていました。パネリストは、私も含めて3人でした。

1人目の清輔夏輝さんは、学生時代のボランティア経験はゼロ。18歳の頃に、ヒッチハイクで日本を3周したという、異色の経験を持ち主でした。そこで様々な経験をふまえ、自分のやりたいことを求めていった結果、「NPO法人チャリティーサンタ」という、クリスマスに貧困家庭に、サンタクロースとしてプレゼントを届ける活動を立ち上げたそうです。

2人目の鈴木平さんは、学生時代から活発にボランティア活動を経験しており、大学時代は、世界30か国巡ってワークキャンプなどに参加していたそうです。現在は、公益社団法人チャレンジ・フォー・チルドレンの活動に関与しています。

内容

ディスカッションの内容は、過去から未来へ順を追って進行していました。「自分たちがボランティアを始めるきっかけ」「ボランティアを始める前後の自分の成長」「大学卒業後の未来像とボランティアとの関わり方」を考えたりしました。

私も、学生のディスカッションに混ざり学生の視点に近い立場で話しをしました。休憩時間やお昼休みに入ると、学生たちが「さっきの話を詳しく教えてください」「自大学での活動をするにはどうしたらいいですか」等の質問をしに来てくれました。学生が求めているものが分かると同時に、自分自身に必要なスキルを知ることができました。本学で学生参画のイベントを企画立案する際のヒントが沢山あった研究交流集会でした。



渡辺あてな

*聖徳大学児童学科卒業生
*聖徳大学生涯学習研究所勤務
関心分野はデザインと美術。

卒業生の今

生涯学習研究所は、1998年度の開所以来、「学生参画」をメインテーマの1つに据え、実践・研究を進めてまいりました。学生時代に生涯学習研究所の実践・研究に関わった卒業生は、現在何をしているのでしょうか？シリーズでお届けします。

第3回の「卒業生の今」は、聖徳大学人文学部生涯教育文化学科卒業（2016年度）の河村有紀さんです。現在は、小学校教諭として、埼玉県さいたま市内の小学校に勤務しながら、ライフワークである「地域の子ども達に向けたお囃子の指導」を継続しています。そんな河村さんに、小学校教諭としてのお仕事について伺いました。



先生を目指したきっかけは？

直接的なきっかけは2つあります。

1つ目のきっかけは、よくある話ですが「小学校5年生の時の担任の先生が大好きだった」ということです。先生と出会って、漠然と「先生みたいな大人になりたいなあ」と考えるようになりました。

2つ目のきっかけは、ライフワークとして継続している「お囃子の指導」です。私は、小学校の3年生の頃から、近所の神社でお囃子を習っていて、現在は指導者として子どもたちと関わっています。中学生の時に、習う側から教える側に変わった時に「教えるって楽しい！」と思うようになりました。



地元であるさいたま市内の高校を卒業後、聖徳大学へ入学。小学校教諭免許状、中学校教諭免許状（社会科）、高校教諭免許状（地理、歴史）、社会教育主任用資格を取得して卒業。

現在は、小学校3年生の担任として奮闘中。学生時代からのあだ名は「ニコちゃん」。由来は、いつもニコニコしていることから。

キーワードは地域でしょうか？

ずっと地域のお囃子に関わっているので、「地域」というのが私の原点にあるのは確かです。

習っていた時、指導者側にまわった時で数えると14年間です。数えてみると長いですね。でもあまりそんな感じがしません（笑）。多分、純粋に人ととの関わりが楽しいからだと思います。「お世話になった人に恩返ししたい」「地域の子ども達のために何かしたい」という気持ちが常にあります。

大学時代の企画・立案等の経験は今に活きていますか？

活きていると思います。一から何かを企画して、実施するという経験ができたことは、

本当に良かったです。様々なことに関わりましたが、特に「おしごとデパート」という、子どものお仕事体験のイベントに関わったことが印象深いです。そこで、保護者の方と関わる機会をいたいたことが、本当に大きかったです。あの時、教室の中だけでは分からなかった、「保護者の方の我が子への想い」に実際に触れることができました。

「先生として 大切にしていること」は？

非常に難しいことかもしれませんが「子どもの居場所に私がなる！」という気持ちを大切にしています。例えば、問題行動をおこしている子どもの「事象」を叱るのではなく、家庭のこと、友人関係のこと等「背景にあること」までしっかり考えることを意識しています。

最近嬉しいことがあります。保護者の方からのアンケートで、「教員生活は色々なことがあると思います。悩んだら、先生のクラスになれて良かったと思っている親子がここに居ることを忘れないで下さい」と書いていただいたのです。これは本当に嬉しかったです。

時間はかかるかもしれませんのが、いつか私も、小学校5年生の時の担任の先生のようになると良いなと思っています。

インタビュー日：2018年3月1日
(有川かおり記)

JULY
07

◆アートパーク10～ラブ&ピース大作戦～ 主催 2017年7月2日

「アートパーク」とは、2008年に生涯学習研究所とNPOをはじめとする地域活動実践者、それをバックアップしている行政が連携し、継続的に実施しているアートプロジェクトです。10回目の節目となる今回のアートパークには1,404名の親子が集まり、学生とアートな遊びを一日楽しみました。



OCTOBER
10

◆第19回生涯学習フォーラム「まちづくり×生涯学習」 主催 2017年10月1日

第I部は、少しでも危険に感じられる遊びは大人が先回りをして禁止し、子どもは指導者の指示に従って遊ぶことがよしとされるような風潮に警鐘を鳴らし、遊び環境作りを保護者と共に創ろうと、ユニークな活動を展開する、NPO法人ハンズオン埼玉の西川正氏をお招きして、お話を伺いました。

第II部で、「アートパークを語ろう!」というテーマで、今まで「アートパーク」に関わってきた方々からの発表を契機として、「教育」「アート」「まちづくり」「子育て」「ランドスケイプ・デザイン」等、多様な視点から発表をしました。

くわしくは本誌8ページへ!



◆第44回松戸まつり 協力 2017年10月7日

伊勢丹通り商店街の皆様と共に、「キッズスクエア」の遊具・ゲームの運営補助を行いました。遊びは5つあり、どのブースも参加者が列を作り楽しんでいました。2日目は伊勢丹通り商店街特設ステージにて、「伊勢丹通りフェスティバル&聖徳フェスティバル」が行われました。本学からは「ブリティッシュミュージック同好会」等が出演し、大いに盛り上がりました。



◆データでみる女性の社会的孤立一夜の世界で働く人々のセカンドキャリアー 主催 2017年10月28日

「どんな状況でも孤立せず、望めば次にいける社会」の実現を目指し、活動している一般社団法人Grow As People (GAP)。本研究会では、風俗産業で働く女性を取り巻く状況及びGAPの活動を角間惇一郎氏よりご講演いただき、社会的孤立解消に向け、私たちや社会はどうあるべきかについて考えました。

くわしくは本誌9ページへ!



◆芸術士と遊ぼう！ 主催 2017年12月4日

芸術士とは香川県高松市が、保育支援の為にスタートさせた「保育所・幼稚園への芸術士派遣事業」で活躍している芸術の専門家の方々のことです。当日は、村井知之氏をお招きし、「からだと話そう」というワークショップを行いました。ワークショップを通じ、「表情」と「身体表現」が、「言葉」を超えたコミュニケーションツールであることを感じました。芸術士と遊び、身も心もほぐれただけではなく、様々なことを学ぶことができました。



◆ジュニア夢カレッジ3～プロから学ぶお仕事体験～ 主催 2017年12月10日

この事業は、子どもと学生の二方向のキャリア教育を目的としたもので、企画から参画した学生30名と生涯学習研究所スタッフ及び地域サポーターが連携しながら協議を進めてきました。この事業は本学の教員以外にも、新京成電鉄株式会社や株式会社ディッジ、弁護士法人千代田オーク法律事務所等、多数の企業や法人からのご協力頂きました。

子ども達が学べる仕事は全14種類あり、事前に選んでもらった職業1種類を体験してもらいました。当日は、178名の小・中学生が参加し、各々が希望した職業を体験していました。参加した子どもたちからは「楽しかった」「絶対に今日体験した職業に就きたい」などの声が寄せられました。



◆子育て世代にやさしいまちづくり 主催 2018年1月15日

特別支援学校にお子さんが通つてらっしゃる保護者の方々でつくった団体「松戸キャラバン隊たねっこ」さんを講師にお招きました。前半の「障がいへの理解」をテーマとした寸劇では、実際におこった場面を例に挙げ、障がい者への、好ましい対応、好ましくない対応を紹介しました。後半の「手作りの小道具を使用した擬似体験」では、障がいの不自由さを理解できる体験を実施しました。



◆佐野市生涯学習フォーラム佐野楽 協力 2018年3月3日～4日

栃木県佐野市で行われた「生涯学習フォーラム佐野楽」の開催に協力しました。なお、このフォーラムには、2012年から継続して協力させていただいております。



◆高齢者支援社会を考える－最後まで地域で元気に暮らすためにpart5－ 主催 2018年3月20日

「高齢者が最後まで地域で元気に暮らす」をキーワードに、毎日新聞社滝野隆浩氏をお呼びし、高齢者支援の現状と課題についてお話ししました。



◆ミニまつぶし2018 協力 2018年3月24日～25日

埼玉県北葛飾郡松伏町で行われている「ミニまつぶし」を開催協力しました。「ミニまつぶし」とは、子ども達が企画し、毎年実施している「子どもだけのまち」です。子どもだけのまちを擬似的に作り、社会の仕組みを学ぶことを目的としています。



「研究成果の見える化」の一環として発行している「生涯学習研究所だより」も第5号の発行となりました。研究所の研究・実践活動を応援して下さっている全ての皆様に感謝申し上げます。

今、生涯学習の領域では「学んだことを社会に活かす」ことが求められています。「個人の学び」のみに視点を当てるのではなく、「学びをいかに社会に還元するか」に力を置いた考え方です。これはまさに、19年前の本研究所開設時から掲げている「生涯学習まちづくり」の考え方です。今後も「書を捨てず町へ出る」のスタンスで、実践と研究を常に往復し、現場の知を言語化できる研究所でありたいと思っています。ご意見等ありましたら、お気軽にお知らせ下さい。今後とも、聖徳大学生涯学習研究所を宜しくお願い致します。(有川)